

ポール・ゴーギャンとその芸術にみる nostalgia

すみだしょうこ
住田翔子

本論文は、芸術的カテゴリーにおける「現前する過去」への快としての *nostalgia* と自己構築との関わりを、19 世紀フランスの芸術家であり、その芸術創造と自己のあり方とを模索し続けたポール・ゴーギャン (Paul Gauguin, 1848-1903) を事例に考察するものである。

nostalgia はこれまで、実際にあった過去や人々の故郷という事実に基づく過去あるいは故郷への憧憬 (ノスタルジア) と解釈されてきた。そのために、心理学的側面からはノスタルジアのアイデンティティとの関係が個人の私的な過去経験とともに語られるに留まり、また政治的文脈においてはノスタルジアが帝国主義的観点のもとに理想的過去を捏造した要因とみなされてきた。一方で本論は、そもそもの *nostalgia* の有する個人とその目の前の過去あるいは故郷を彷彿させる対象との間に生じる感情という意味に立ち戻り、個人の現実との対応関係における自己構築の過程を明らかにする。

ゴーギャンに関する研究では、アイデンティティとノスタルジアの関係も語られてきた。フランス、ペルーという西洋、非西洋の血統を持つゴーギャンは必然的に自己形成を迫られ、1890 年代から晩年までの南洋タヒチでの滞在は自身の幼年時代へ戻る行為であった。しかしながら、自画像制作という表現行為から、ゴーギャンの自己構築が必然的でも生来的でもなく、ゴーギャンの当時の現状認識に始まるものと考えられる。そしてその自己認識は、タヒチ以前から見出され、特に 1880 年代半ばを過ごすブルターニュにおいて強まる。ブルターニュは当時から、「太古の神秘の残る土地」としてパリのブルジョワジーから注目を浴びていた。ここから、ゴーギャンの自己認識は、自身の過去との関係のみに終始しない *nostalgia* と関わるものといえる。

当時のブルターニュに対する言説およびイメージを、絵画、観光ガイドからたどれ

ば、18 世紀末から 19 世紀初頭においては異質の他者としての「野蛮な」イメージが主流だったのが、19 世紀半ばには、自己の過去としての「内なる野蛮」のイメージに変遷する。ゴーギャンのブルターニュ表象も、一見すると、「内なる野蛮」に重なる自然とともに生きる人々、あるいは信仰心の深い人々の描写に見える。しかしながらゴーギャンは、ブルターニュを描写するのみならず自己の姿にも投影させることによって、アイデンティティ獲得に至ったと考えられる。ゴーギャンにとってブルターニュは、**nostalgia** によって自己形成を可能にした場所となったのである。